

「エヌマ・エリシュ」の宇宙論

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2008-01-25
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 荒川, 紘
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00000439

「エヌマ・エリシュ」の宇宙論

荒 川 紘

私たちの生きる世界は全体としてどう説明できるのか——この問いにたいする答えが宇宙論であるといつてよい。答えのひとつが時間的な観点から宇宙をとらえようとする宇宙創成論コスモゴニーであり、もうひとつは空間的な観点から宇宙を理解しようとする宇宙構造論コスモグラフィである。世界の起源と秩序についての思索、それが統一されて宇宙論は完結する。

中世ヨーロッパを支配したスコラ哲学の宇宙創成論は、『旧約聖書』「創世記」の神による天地万物の創造説にしたがい、しかも、アウグスティヌスの解釈をとり、宇宙は無から創造されたとする。宇宙構造論にはアリストテレスの天球地球説が採用された。人間の居住する地球は宇宙のもつとも「下」に（宇宙の中心に）位置し、そのまわりを聖なる天球が回転する。現代のビッグバン宇宙論についていえば、アインシュタインの一般相対性理論を基礎に、宇宙がどのような形で生まれ、現在どのような形態をとるのが統一的にしめされた。ひとつの宇宙方程式で宇宙の創成と構造の両者が説明されるのである。

もちろん、宇宙論の歴史は人間の歴史とおなじく古く、メソポタミアの地から出土する粘土板文書にも宇宙論的な記述がみとめられる。文字の発明者であったシュメール人も宇宙論に触れた文書を残しているが、整った形の宇宙論を伝えて

くれるのは、シュメール人のあとをついでメソポタミアの支配者となったバビロニア人の叙事詩「エヌマ・エリシュ」であった。

バビロンの英雄神マルドゥクがどのようにしてバビロニアの神々の危機を救い、最高神の地位に就いたかを語るこの詩は、なによりもバビロンの王朝によるバビロニアの支配を正当化するための政治的な神話である。しかし、そこにはバビロニア人のあいだに流布していた宇宙の創成と構造についての所説がみとめられる。だから、冒頭のことばからふつう「エヌマ・エリシュ」とよばれるこの叙事詩は「天地創造の詩」とも称されてきた。

メソポタミアの地ではメソポタミア文明の消滅とともに、古代メソポタミアの宇宙論も姿を消すが、その宇宙論は改変されながらも、メソポタミア文明を受けついだユダヤ人やギリシア人に継承された。「エヌマ・エリシュ」のマルドゥクによる宇宙創成の神話は「創世記」の天地創造の物語に素材を提供し、「エヌマ・エリシュ」の記す水の宇宙論や天地像はギリシア・ミレトスの哲学者たちの自然学にも影響を与えた。メソポタミアの宇宙論は、ヨーロッパの科学思想の基礎を構成したキリスト教とギリシア哲学の両方の源泉に位置づけることができる。

ということで、「エヌマ・エリシュ」は宇宙論の歴史の序章としてだけでなく、現代社会を支配する科学文明の性格をその根源から見極めるためにも、見過ごすことができない。三〇〇〇年以上の時をへてもなおその生命力を維持しているのである。

1 宇宙の創成

叙事詩「エヌマ・エリシュ」の成立については、バビロニア人が全メソポタミアを統一したバビロン第一王朝の時代（前

一八九四年ころ―前一九五五年ころ〕というのが有力であるが、もっと時代を下げる見方もある。なお、その時期は確定されていない。

私たちにとって興味のあるのは、まず、七枚の粘土板からなる「エヌマ・エリシュ」の第Ⅰ粘土板の冒頭に記されたマルドウクの祖先についての物語である。男神アプスーと女神ティアマトにはじまり、バビロニアの英雄神マルドウクの父にあたるヌディムンドにいたる神々の系譜をのべる。

上ではまだ天空が命名されず、

下では大地が名づけられなかったとき、

かれら（神々）をはじめてもうけた男親、アプスー（「淡水」）、

ムンム（「生命力」）、かれらをすべて生んだ女親、ティアマト（「塩水」）だけがいて、

かれらの水（淡水と塩水）が一つに混り合った。

草地は（まだ）織りなされず、アシのしげみは見あたらなかった。

神々はいずれも（まだ）姿をみせず、

天命も定められていなかったとき、

（そのとき）神々がその混合水のなかで創られた。

（男）神ラハムと（女）神ラハムが姿を与えられ、そう名づけられた。

かれらの年が進み、背丈がのびていく間に、

アンシヤルとキシヤルが創られ、かれらにまさるものとなった。

かれらは日を重ね、年を加えていった。

かれらの息子がアヌ、父祖に並ぶもの。

アンシヤルは長子アヌを（自分と）瓜二つにつくった。

そうしてかれの生き写し、アヌはヌデイムンド（エア）をもうけた。

世界のはじまりのときに存在していたのは男神アプスーと女神ティアマトとムンムの三神。このなかで、アプスーとティアマトからは男女神のラハムとラハムが生まれ、ラハムとラハムからは男女神アンシヤルとキシヤルが誕生する。そして、アンシヤルから生まれたのが男神アヌ、アヌは男神ヌデイムンドを生む。ヌデイムンドは一般にはエアとよばれていた。このアプスー、ティアマト、ムンムからアヌとヌデイムンドまでの系譜は神統譜のかたちで神々の出現をのべたものである。しかし、古代のメソポタミアでは、アプスーとティアマトが淡水と塩水でもあったように、これらの神々はがんらい自然を意味する神であった。自然には神の力が内在するのであって、ここには、自然神から人格神への移行が読みとれよう。

メソポタミアはこのような神々からなる多神教の世界であった。「エヌマ・エリシュ」も天と地にはそれぞれ三〇〇の神が配されてと記す。アヌについていえば、それは上空に広がる天であり、天と一体の人格的な神でもあった。それを天の神とよんでおこう。エアは水の神（地下の淡水で、そのため大地の神ともみられていた）を意味した。エアは知恵の神ともみなされた。

そうであると、「エヌマ・エリシュ」の冒頭の神統譜は原初の淡水と塩水が混じり合った結果として、天と地が生成された宇宙創成論を潜ませた物語とも読める。ラハムとラハム、アンシヤルとキシヤルについて、T・ヤコブセンは、ラハム

とラハムを沈泥の神、アンシヤルとキシヤルを「天の地平線」の神と「地の地平線」の神と解釈する。⁽¹⁾ その「天の地平線」「地の地平線」と「瓜二つに」に、天アヌがつくられ、また、アヌと「生き写し」にヌディムンド、つまり大地と解せるエアが出現した。要約すれば、上下の区別もつかない原初の混沌の水から、泥が生まれ、それは地平線まで広がり、その結果、天と地下の水が生じた。そして、ヤコブセンはアンシヤルとキシヤルにつづくのは、ほんらいはアヌとヌディムンド(エア)ではなく、アヌ(天)とキ(大地)であったと推測する。⁽²⁾ 実質的な内容にはほとんど変わりが無いものの、このほうが確かにすっきりする。詩の第一句、「上ではまだ天空が命名されず、下では大地が名づけられなかったとき」の「天空」と「大地」に対応するといえよう。

天と地の生成を神統譜の形で語る。似たような天地の創成論はヘシオドスの『神統記』にも認められる。ちようど生物が進化するようになして宇宙が生みだされるのであって、この「エヌマ・エリシュ」の冒頭の宇宙創成論は進化型とよぶことができる。

その後物語は、アンシヤル、アヌ、エアらの神々が祖先神のアプスーとティアマトに対立、エアはアプスーを殺害する話へすすむ。そして、エアはアプスーの上にみずからの家を造り、それを「アプスー」と名づける。大地の下に広がる原初の水アプスーの上に位置する水の神のエア(地下水を蔵する大地を想像したほうがよい)、新旧の水の神が上下の関係でとらえられているのだが、新しい神のエアが古いアプスーにとってかわったことを語っているようである。そのエアの家の「アプスー」でエアはバビロニアの最高神となるマルドゥクを生む。母はダムキナ、初期のシユメールでは、ダムガルヌンナともよばれていた大地母神である。⁽³⁾

しかしながら、「エヌマ・エリシュ」で天と地の創成を明確に語るのはその後、エアの子のマルドゥクを主人公とする物語においてであった。私たちにとってもっとも興味のある場面である。

アプスーが殺害された後、ティアマトは総司令官に立て、復讐にでるが、子孫の神々はエアの子であるマルドゥクを指導者としてティアマトに対抗しようとし、マルドゥクも戦いに勝利したときには、自分を神々の主権者とするとの条件をみとめさせたうえで、それを受ける。マルドゥク軍とティアマト軍との戦闘を記すのは、第Ⅳの粘土板、「エヌマ・エリシュ」のクライマックスの場面である。ティアマトはみずから産んだヘビやサソリなどの怪物を従える。マルドゥクが味方としたのは風、「南風、北風、東風、西風」と「凶風、砂風、雷雨、四つの風、七つの風、烈風、颶風(?)、といった悪風」。ティアマトに戦いを挑んだマルドゥクは、その悪風をティアマトの口の吹き込んで腹をふくらませ、矢を放って心臓を射ぬき、縛り上げて命を奪い、そのティアマトの体から宇宙を形成する。

主(マルドゥク)はティアマトの脚にのり、

かれの仮借ない三つ又の鉾で頭蓋骨を打ち砕いた。

かれが彼女の血管を切ると、

北風がその血を(どこか)分らないところへ運び去った。

かれの父祖たちは(これを)見て、喜び、歓呼の声をあげ、

かれらはかれにお祝いの贈りものの数かずを送った。

主は(手を)休め、肉魂(?)を分断して

手の込んだ美事な作品でも創ったらどうか、と彼女の死骸を眺めていた。

かれは干し魚のようにそれを二つに切り裂き、

その半分を固定し、天として張りめぐらした。

かれは（それに）門を通し、番人たちをおき、

かれらにその水分を流出させてはならないと命じた。

マルドゥクによつて二つに分断されたティアマトの体の半分で天が形成された。女神のティアマトはヘビやサソリの怪物を産んだとされているように龍蛇の怪物である水の神であつた。だから、その体の半分からつくられた天には水が満ちている。天から雨が降るのもそのためである。ときには、豪雨となり、洪水がおこる。そうさせないよう天には「門」を設け、「番人」を置いた。

分断された体のもう半分は大地となつた。第Vの粘土板には、「かれは（彼女の骸の半分を）張りめぐらし、地を堅固にかためた」とのくだりがみとめられる。こうして、天地つまり全宇宙はマルドゥクのものとなる。

冒頭のアプスーとティアマトという水（の神）から天と地（の神）が生成されたという進化型の宇宙創成論にたいして創造型とよぶことができる。マルドゥクはプラトンのデミウルゴスの神であるが、より類似した創成論は「創世記」第一章が記す神エロヒームによる天地の創造であろう。

人間もマルドゥクの創造である。第VI粘土板では、

わたし（マルドゥク）は血をまとめて骨をつくりだし、

最初の人間をつくらうと思う。その名は《人^{アメル}》だ。

わたしは最初の人間、《人》を造りだそうと思うのだ。

というマルドゥクのことばが見られる。それにしたがって、エアの手で、ティアマト軍の総司令官キングが殺されて、その血から人間が創造された。これも創造型の創成論である。こうして人間もまたマルドゥクのものであった。

「エヌマ・エリシュ」には進化型と創造型の二種類の創成論がふくまれていたが、ほんらいは独立した神話であったと推測される。マルドゥクをエアの子に位置づけることで、マルドゥクによる天地創造の神話とティアマトとアプスーに起源する天地生成の神話とが結合されたのではなからうか。似たことは『旧約聖書』『創世記』にみとめられる。それは、資料を異にする二つの創成論からなるのであって、第一章の神エロヒムによる天地と動植物・人間の創造につづいて、第二章では、天地の創造は省かれているが、主ヤーウエによる人間（アダム）の創造があらためて語られる。

しかし、バビロニア人にとつての天地創成の物語はマルドゥクによる創造型の神話ほうであった。最初の進化型の宇宙創成論は神統譜のなかに隠されていた宇宙創成論、「エヌマ・エリシュ」ではこの部分はバビロニアの英雄神マルドゥクの出現を語り出すための物語であった。もともとは水からの天地の生成をかたる神話であったのだが、ここでは神統譜として利用されたのである。

マルドゥクはこのように天と地を創造した後、天と空と地下世界（アプスー）にアヌとエンリルとエアを統治者として住みつかせた。アヌとエアはシュメールらしいの神である。シュメール語ではそれぞれアンとエンキとよばれていた。エンリルは大気（風）の神、シュメールでは主神の地位にあった。バビロニアのマルドゥクはシュメールの神々の後裔と位置づけられる一方でシュメールの神々の支配者となり、彼らに宇宙各領域の統治を委ねたのである。

2 宇宙の構造

その天に秩序をもたらしたのもマルドゥクであった。第V粘土板では、黄道十二宮の星座について、つぎのようにのべている。

かれら（神々）の似姿であるそれぞれの星、十二宮の星座を置き、
一年をさだめ、基礎的割りふりをしてから、

十二の月にそれぞれ三つの（旬日の）星座を配置した。

かれは一年の日日に区切りをつ（けた）のち、

誰も秩序を乱すようなことを仕出かしたり、

ずぼらにならないよう

木星^{ネビル}の場所（天の赤道^{ネビル}とアヌの道と黄道の交点）を設け、

それらとの関係を決めた。

黄道十二宮をさだめたのにつづいて、マルドゥクは各宮を三つに分け、三六の星座に分割した。一〇度を単位とする天の座標であり、そこを運行する太陽の位置から年の初めや月が決められるのであって、それが暦の作成の基本となる。バビロニアの時代、年の初め（ニサンの月の第一日）は日の出のときフンガ星（牡羊座の α 星）が見えはじめた日と決めら

れていた。春分のころにあたる⁽⁴⁾。一年は太陽の運行による一方で、日次と月次は月の満ち欠けで決められる太陽太陰暦であった。月次と季節のずれを調整するための閏月も設けられていた。精度の高い太陽太陰暦が使われていたのである。木星^{ネビル}というのはマルドウクの星、第Ⅶ粘土板には、マルドウクの別名のひとつに「ネビル」をあげ、「ネビル（木星）はかれ（マルドウク）が空にきらめかせた星」とある。

バビロニアでも、もつとも重要な天体は太陽と月であった。マルドウクは太陽の運行や月の満ち欠けをさだめたのだが、興味ぶかいのは東西に設けられた太陽の出入り口の「門」である。朝に東の門から出た太陽は夕方には西の門に姿を隠す。時間はこの太陽の位置で測られるが、夜は星の位置から決められる。時間についての制度についてのべておけば、昼と夜をそれぞれ六等分する不定時法（江戸時代の日本の時法とおなじ）、時間の単位はベールー（江戸時代の一時^{とき}と同じ、現在の二時間に相当）であった。

そして、マルドウクは（天・大気・地下とは別に）天におけるアヌとエンリルとエアの統治域をさだめた。「アヌの道」は天の赤道を中心に太陽その他の惑星が運行する天の高い部分（低緯度の地であるため、赤道は天頂の近くをとおる）、「エンリルの道」は北極星を中心にしてつねに地上に観測される部分、「エアの道」はほとんど時間を地平線下に隠す南の天の部分とされた。このようなアヌ、エンリル、エアというかつての主神たちの上に君臨するのがマルドウクである。エンリルは大気の神でもあるのだが、気象の最終的な統轄者はマルドウクであった。雲をつくったのもマルドウク、そして、風雨も寒暖もマルドウクの手中にあった。

天につづいて、大地の細部も工作する。ティアマトの半分から大地をつくったマルドウクは、ティアマトの頭を固定して、そこに山を築き、両眼をティグリスとユーフラテスの両河の水源とした。また、彼女の乳房のところにも豊かな清水を湧き出す泉を掘り抜いた。尻尾はひねって天の「最高の結び目^{ドウルマハ}」（北極星）につないだ。これらの資料だけでは天地の全

体的な構造はとらえがたい。とくに、大地の構造がはっきりしない。それを補ってくれるのがバビロニア人の世界像を描いた粘土板の「バビロニアの世界図」(大英博物館蔵)、前六〇〇年ころに製作されたと推定されているが、その世界像はずつと古い時代にさかのぼれると考えられている。

そこで注目されるのはバビロンをほぼ中心として描かれた二つの同心円。内側の円は大地、そのまわりを円環形の大洋がめぐる。鹹水の海である。この海が入りくむペルシア湾にはユーフラテス川が流れこみ、その水源の山も描かれている。円環の大洋の外側には七つの三角形(一部破損している)が見られるが、それは海の彼方の未知の世界の島である。

ここには天は描かれていないが、M・ハクスリーは多くの資料から判断して、古代メソポタミア人は天を球と考えていたと推察した。⁽⁵⁾そして、天体が配されている球形の天(碧玉でできている)は円環状の大洋の外側の縁と重なっているとした。天が球形であるから、その水平面による断面は円形なのである。そうであれば、ヤコブセンが「天の地平線」と解釈したアンシヤルはこの大洋の外側の縁をしめす円形にあたる。同様に、「地の地平線」と解釈したキシヤルは大地の輪郭をしめす円形となる。こうして、球形の天と円形の地は一体のものとして秩序体を構成していた。さらに、ハクスリーは天は北極星にむかう軸を中心に回転していると考えていたと主張、その理由に大熊座を「荷車座」と称していたことをあげる。

3 「エヌマ・エリシュ」の宇宙論の源流(1) —— ニンフルサグとエンキ

「エヌマ・エリシュ」の宇宙論はどのようにして生まれたのか。文字、青銅器、天文暦法など、シュメールの都市文明が新来のバビロニア人にうけつがれたことを考えれば、宇宙論についてもシュメールの時代に目をむけねばならない。

すでにのべたように、「エヌマ・エリシュ」に登場するアヌとエアはシュメールではそれぞれアンとエンキと称された神、エンリルはシュメールでもバビロニアでもエンリルである。天の神のアンはウルクの守護神、大気（風）の神のエンリルはニップールの守護神、水の神のエンキはエリドウの守護神であった。これらシュメールの神について、ノアの洪水の原形を伝える「洪水伝説」は、最初に人類を創造した神として、アン、エンリル、エンキとニンフルサグの名をあげていた。ここに新しく登場するニンフルサグは、ケシュ、ラガツシュ、アル・ウバイドの守護神であった。ニンフルサグの意味は山の女主人、エアの配偶神であったダムキナ、つまりダムガルヌナと同一視されている。⁽⁶⁾これらの女神は豊饒を象徴する神、シュメール人が進出する以前に大麦と小麦の農耕に従事していたウヴァイド人たちはもちろん、古くから広い地域の人々に信仰されていた大地母神である。それらの女神とその信仰を裏づけるような女性像も各地から出土している。⁽⁷⁾ニンフルサグやダンガルヌナのほかにニンマー、ニンスイキル、ニントウといった多くの名が伝わっているのは大地母神がメソポタミアの広い地域で古くから信仰されたためであろう。天安と対置される大地キもニンフルサグの系譜にあるといえる。

ニンフルサグの性格が比較的詳しく語られているのは、シュメールの神話「エンキとニンフルサグ」である。神話の舞台は「浄く、輝く土地」のデイルムン、聖書のエデンの園の原形とみられることもある。そこに、ニンフルサグは夫のエンキと一緒にデイルムンに住む。

「浄く、輝く土地」でありながら、デイルムンは水がない。そこで、ニンフルサグはエンキに水を供給するように懇請する、「あなたの町を国土の穀物倉とするように！」。エンキは大地から水を湧き出させ、「彼女の町は豊かな水を飲んだ」。それによって、「彼女の町は国土の穀物倉となった。デイルムンは穀物倉となった」。豊饒をもたらしてくるのは夫のエンキ。主役の女神から男神への交替を暗示しているようである。実際にも、前三千年紀の終わりのころ、つまりウル第三王

神話が残されているが、シュメール時代のアンの神話を受け継いだものと見てよいであろう。そして、アンにかわって浮上してきたのが大氣の神エンリルだった。S・N・クレイマーは都市ウルクの政治的地位の凋落によってアンの地位はエンリルにとって代わられた、と理解していた。⁽⁹⁾

4 「エヌマ・エリシュ」の宇宙論の源流(2) — エンリルからマルドゥクへ

メソポタミアの南部を中心に各都市が政治的に自立していたシュメールの都市国家は前三千年紀の後半になると、ひとりの王を頂点に各都市を官僚によって支配する中央集権的な統一国家の誕生にむかいはじめた。他方で、北部に住んでいた東セム系の遊牧民アッカド人が勢力を強め、前二三三四年には、キシユの高官となったサルゴンによってアッカド王朝が築かれるが、四代目のナラムシンのとき、東のエラム(ザクロス山地)の方から異民族のグディ人が侵入、シュメールの都市が自立する。その後、グディ人も駆逐され、ウルのウル・ナムム王によって、シュメール人のウル第三王朝が築かれる。シュメールの文化が再興され、その最盛期をむかえた。この王朝で最高神の位置を占めたのがエンリル。シュメールの王権が諸都市を支配下においたように、エンリルは神々の頂点にたち、エンリルを中心とする神話がつくられていた。

この時代、エンキも創造の神とみなされるようになったが、天地の創造をつかさどる神の役割をになうのがエンリルであつた。その神話のひとつが、「原初の海」ナムムにはじまる創成神話である。

かつて世界に存在したのは「原初の海」ナムムのみ、そのなかに天と地の一体物「宇宙の山」が出現、同時に大氣の神エンリルが生まれる。やがて、そのエンリルによって「宇宙(天地アンキ)の山」は二つに分離され、天安と地キが作り出されたという。大氣は天と地のあいだに存在する物質なのだが、その大氣と風の神が天と地を分離したというのであ

る。⁽¹⁰⁾ 統一国家の神エンリルが宇宙的神となった。

一世紀ほどで、シュメールのウル第三王朝も衰退、退場した。その原因のひとつが、南メソポタミアでは耕地が長いあいだ使用された結果、土中にふくまれる塩分が増加したためとみられている。バビロニアの神話「アトラ・ハーシス物語」も、「黒い田畑は白くなり、広大な草原は塩で枯れてしまった」とのべているように、農民にとって塩化は致命的、麦の生産力は極度に低下する。『旧約聖書』「士師記」にも町を荒廃させるのに塩を撒く話が載る（九・四五）。土壌の塩化をくい止めるにはつねに水を流しつづけねばならない。そのため、以前にまして大規模な灌漑の整備が必要とされた。⁽¹¹⁾ それでも、南メソポタミアの生産力は低下、ウル第三王朝は倒れる。

その結果、農業の中心は北に移るが、前三千年紀の末期から西セム族（シリア砂漠の遊牧民）のアムル人、つまりバビロニア人がメソポタミアの北部で勢力を強め、やがて、シュメール人の勢力下にあったメソポタミアの中心部に進出、前一八三〇年ころにはバビロンを首都とするバビロン第一王朝を築いた。前一七九二年に即位した第六代のハンムラビはエシュヌナ、エラム、マリ、ラルサなどを制圧、全メソポタミア統一をなしとげた。その後も、王朝は国内の治水工事、灌漑用水路の拡充につとめ、また、神殿の建設など、シュメールの都市文明をうけつぎ、さらに発展させた。もともとメソポタミアは木材も石材も産しない土地、身近にある材料は泥と葦のみ。それでも、外国から材料を輸入して、家具、容器、象眼細工、楽器などの木工業や金属業を発達させた。資源の貧しさが文明の原動力であったといえる。しかし、その経済的基盤となったのは小麦や大麦の農業であった。雨は少ないが、灌漑がなされれば、高収穫がえられる肥沃な土地となる。そのためにも強力な国家権力が必要とされた。

そのとき、いま見た、大気（風）の神エンリルが「宇宙の山」を二分して天と地をつくるという神話、あるいは類似の神話がバビロニア人にうけつがれ、海水の神ティアマトを二分して天と地を創造するという「エヌマ・エリシュ」の物語

が成立したのではないか。マルドゥクは弓矢や三つ又の鉞で退治したのだが、風も武器とされていた。その風でティアマトの腹をふくらませたのである。このように、風を武器とするという点でも、マルドゥクは大気の神エンリルを継承していた。

マルドゥクが宇宙の創造者となったのは、この神がバビロン地方の守護神だったからにほかならない。もともとは農業神あるいは太陽神であったが、バビロン第一王朝が成立し、ハンムラビによって強大な帝国が形成されるとともに、マルドゥクがエンリルにかわって最高神の地位を獲得、バビロニアの英雄神となったと思われる。こうして、主役は天の神アヌからエンリルに、そしてエンリルからマルドゥクにとってかわられた。そのためであるう、「エヌマ・エリシュ」も、「神々の最高神、マルドゥク」(第Ⅶ粘土板一四九)とよびかけている。また、エンリルはマルドゥクの父とも見なされもするが、神統譜的關係というよりも、主神権の委譲とその正当化をしめすものとみられている。⁽¹²⁾

天地の原質が「エヌマ・エリシュ」では龍蛇の神のティアマトとなったのはなぜか。この龍蛇の神は、天水や小河川に依存していた新石器時代の農耕社会で水と豊饒のシンボルと見なされていた蛇の信仰にさかのぼれるであろうが、ティグリスとユーフラテス河の灌漑による農業に移行したとき、シンボルとしての蛇は大蛇の龍に変えられたようである。⁽¹³⁾ しばしば洪水で生産と生活を脅かす両河には小さな蛇は似つかわしくない。豊饒の水をもたらす両河の洪水は、ナイル川の洪水が一定の時期に一定の水嵩を増すのとはちがって、その時期も水嵩も一定していない。統御されるべき暴れ川であった。どちらかといえば、治めやすかったのは河床が高く、流れがゆるやかであったユーフラテス川であって、厄介なティグリス川の灌漑が進むのはバビロン第一王朝の成立以降であった。⁽¹⁴⁾

こうして、マルドゥクによる龍蛇の神ティアマトの殺害はティグリスとユーフラテス河を統御するバビロン第一王朝の政治的力を語る神話ともよめる。同時に、古い神ティアマトの殺害はバビロニア人がシュメール人に代わり国土の支配者

となつたことを主張するものであつた。

しかし、殺される神ティアマトはなぜ塩水の神であつたのか。これまでの議論からいって、宇宙の原初は海であつたというシュメールの神話を受け継いだと推測されるが、それとともに、バビロニア人も土壌の塩化と戦わねばならなかったことが想起せねばならない。バビロニアでも穀物生産は国家の生命線、塩の退治は最大の国家的事業であつた。それゆえ、ティアマトは大河のシンボルである龍蛇の神であるとともに、塩水の神でもあらねばならなかったのではなからうか。

悪神ティアマトを退治し、天地を創造したマルドウクの登場によって、メソポタミアの神の観念も新しい段階に到達した。すでに、シュメールの時代のアン、エンリル、エンキといった神々にもその傾向は見られたが、全メソポタミアの神々に君臨する神が登場したのである。多神教の世界のメソポタミアでも、一神教とはいえなくても、ある神が特に重要視される単一神教の世界に移行していたといえる。進化型から創造型への移行にとまなうものであつて、進化型では多数の神の寄与が必要であつたのにたいして、創造型はたったひとりの神で全世界は説明可能となつた。

5 「エヌマ・エリシュ」の宇宙論の源流(3) — 宇宙国家バビロニア

「エヌマ・エリシュ」では、バビロンの王朝の誕生史とともに、王朝の政治的権力の強大さが語られていた。「天地の神々の王」(第V粘土版)であるマルドウクは全メソポタミアを統治するバビロンの王を隠喩的に表現する。そして、最高神マルドウクを中心とする神々のパンテオンはバビロンの王を中心とする地上の政治体制を投影したものだつた。

マルドウクによつて創造された宇宙の秩序、それにバビロンを中心とする大帝國を象徴するのが巨大なピラミッド状の構造物ジククラトである。「エヌマ・エリシュ」の第V粘土版でも、マルドウクが、「偉大な神々の家(バビロン)」を建造

する計画をたてたことが記され、第VI粘土版には、神々の手でレンガがつけられ、それでジググラトと神殿エ・サギラが造営されたとある。新バビロニア時代（前六一二年―前五三九年）のバビロンにつくられたジググラトの遺構によると基底は一边が九メートルの方形、高さについては約九〇メートルあったと推定されている。⁽¹⁵⁾これが聖書で神を怒らせた「天まで届く塔」（『創世記』一一・一九）である。ふつう「バベルの塔」とよばれる。

バビロンのジググラトはエ・テメン・アン・キ（天と地の家）という名もしめすように、天と地をむすぶ宇宙軸であり、小宇宙であった。世界の中心であるマルドウクの都バビロンは天アヌに直結する。それは、「エヌマ・エリシュ」の冒頭に見られるアヌからマルドウクへの系譜に対応するといえよう。宇宙・ジググラト・マルドウク・バビロンの王は象徴的に重なる。バビロニアの王朝は宇宙的国家であった。

ジググラトが建設されるようになるのはシュメールの時代、最初期のものには、前三千年紀前半につくられたウルクのジググラトがある。ウル第三王朝下でも、さかんに建造され、また再建もされた。シュメールの主神エンリルの町ニップールのジググラトはドウル・アン・キ（天地の結び目）という名とともに「山の家」や「嵐の山」という名でもよばれていたが、この「山」という呼称は、ジググラトの起源が山の信仰にあったこと、ジググラトはシュメール人によって信仰されていた現実の山に代わりに造られた人工の山であることを示唆する。⁽¹⁶⁾つまり、シュメール人が山岳地帯から進出してきた民族であることを推察させるのであって、だからであろう、エンリルは「大いなる山」とか「外国の王」とかよばれていた。⁽¹⁷⁾おそらくは、前述したシュメールの創成神話でエンリルによって天と地に分離された「宇宙の山」はこのシュメールのジググラトの思想から生まれた神話と推察される。

バビロニアの宇宙的国家を象徴する、もうひとつのものが新年祭である。毎年バビロニア暦の正月にあたるニサンの月にジググラトの南側にある神殿エ・サギラで催される新年祭は豊饒の祭りであるとともに、王権の更新の儀式であった。

その内容を記す「バビロンの新年祭」は粘土板の破損のために部分的にしか明らかになっていない。それでも、エ・サギラのマルドゥク像の前で王と大祭司が挙行するクライマックスの場面では、大祭司が「エヌマ・エリシュ」を唱詠して神マルドゥクと王都バビロンを讃美、ついで、王はこの一年間政治と祭祀を怠らなかつたことを宣誓する。

ここでは、バビロンの王はマルドゥクと一体である。マルドゥクが天地と人間の創造者であるように、バビロンの王は国土と人民の支配者である。とくに、人間創造の目的について、「エヌマ・エリシュ」の第VI粘土板は、「神々の夫役が（かわりに人に）課せられ」るようになるためであるとのべている。人間は支配者階級を都市の建設や神殿の造営などのきびしい労役から解放するためにつくられたのだと読みとれる。国家による人民支配の正当性を語るもの、神に奉仕することは王に仕えることを意味していた。

この神々を労役から解放するための人間の創造の神話は「アトラ・ハシス物語」や「人間の創造」でも語られる。「アトラ・ハシス物語」はかつては神々がきつい労役に従っていたことを述べるとともに、そのためにエンキがある神の肉と血を粘土に混ぜて人間をつくった。「人間の創造」でも神を労役から解放するために、二人のラムガという神が殺され、その血から人間がつくられた。

「エヌマ・エリシュ」と、これらの神話は権力の保持と拡大の道具として機能する。神話の主役が蛇や大地母神から男性神に代わるとき、天と地の起源と秩序が体系的にしめされるのと同時に、神と人間との関係が表明される。もちろん、「エヌマ・エリシュ」では、マルドゥクのティアマト退治による天地の創造はバビロニア王朝による国土の支配の根拠を宣するものであつたし、その宇宙像は中央集権的国家の体制に相応するものであつた。

6 「エヌマ・エリシュ」の宇宙論の影響——ユダヤ人の宗教とギリシア人の科学

メソポタミアの宇宙論は周辺の民族に浸透する。もつとも重要であるのはユダヤ人への影響。ノアの洪水とそれにつづくバベルの塔の物語がメソポタミア起源であることは広く知られているが、ユダヤ教の基本的な教義である天地や人間の創造の物語もメソポタミアにさかのぼれるのであり、このユダヤ教の宇宙思想はキリスト教にも引き渡された。

前一二〇〇年ごろからカナンの地に住み、都市と農村の生活を営んでいたユダヤ人によつて信仰されていた神ヤーウエは、「イザヤ書」では「万軍の主」(六・三)とよばれていたように、がんらい戦いの神であった。しかし、定住の生活に入つて農耕が重要になると農耕の神の性格を強くする。『旧約聖書』「創世記」第二章が「主なる神が地と天を造られたとき、地上にはまだ野の木も、野の草も生えていなかった。主なる神が地上に雨をお送りにならなかったからである。また土を耕す人もいなかった」と記すのもヤーウエが農耕の神と見られていたからであろう。この後には、「しかし、水が地下から湧き出て、土の面をすべて潤した」とつづく。ヤーウエは地下からも水を湧きださせてくれたのである。成立は前九、八世紀ごろとされている。直接にはカナンの地で信仰されていた豊饒神バールの影響であろうが、その背景には大地に水を供給して肥沃の土地にしたエンキのような神の存在も見落とせない。

しかし、ユダヤ教が決定的な影響をうけたのは、ユダヤ人が前五八七年から前五三八年までバビロンに捕囚されていた時期である。ヤーウエの唯一神性が強調されるようになり、「イザヤ書」で預言者の「第二イザヤ」が著わしたとみられている部分には、「わたしをおいて神はない」というヤーウエの言葉が現われる。おなじころに成立した「ヨブ記」でも、ヨブはヤーウエに「あなたは全能」(四二・二)と答えていた。かつて現実に存在した王の姿の投影であるとともに、みずか

らの国を失ったユダヤ人の願望が映されたものとみることもできよう。

『旧約聖書』「創世記」第一章の天地・万物の創造の物語が生み出されたのも捕囚の時期と考えられている。原初るとき、「闇が深淵の面」にあったが、神エロヒームは水を二分して天と地を創造したという物語が、「エヌマ・エリシュ」のマルドゥクが水の神ティアマトを切り裂きいて天地を創造したという神話、あるいは同系統の神話をもとにして成立したのは疑えない。「創世記」の「深淵」テホーム *tehom* は「エヌマ・エリシュ」で天地の原質とされたティアマト *Tiamat* から派生したとはいえないが、*tehom* も *Tiamat* もある共通のセム系のことばに起源するという。¹¹⁸

『旧約聖書』の神は唯一神、「創世記」第一章の天地創造の物語では、神はエロヒームとよばれた。エロヒームはカナンで「神」を意味する一般名詞エルの複数形であるが、力や威厳の卓越性を意味する複数形であって、単数の神ヤーウエと同一視されていた。メソポタミアは多神教の世界、それでも「エヌマ・エリシュ」のマルドゥクが単一神教的な神であったことが、「エヌマ・エリシュ」の創成論が受け容れられた要因のひとつにあげることができよう。

しかし、ヤーウエとマルドゥクの間には飛躍があることもみとめねばならない。マルドゥクは弓矢と三叉の鉞と風を武器にしてティアマトを分断、天地を創造したのにたいして、神エロヒームは言葉だけで水を二分する。ヤーウエ（エロヒーム）は唯一神的性格を強めるだけでなく、超越的な力を有する存在であった。

『旧約聖書』の宇宙構造論についても、「エヌマ・エリシュ」との繋がりを推察される。『旧約聖書』と「エヌマ・エリシュ」がどちらでも天地は水（の神）が二分されて創造されたのに対応して、『旧約聖書』においても、天と大地には水が貯蔵されていた。「創世記」のノアの洪水のところでは、「大いなる深淵の源がことごとく裂け、天の窓は開かれた」（七・一二）という地の水と天の水についての描写がみられる。

ただ、幾何学的な構造についての関心は希薄である。「箴言」には、「ヤハウエが深淵の面に輪を描いて境界とされた」（八・

二七)といった記述がまとめられ、大地を円形と考えていたと推測されるのであるが積極的に天地の構造について述べようとしなない。説明の原理はあくまでも神である。『旧約聖書』の成立はユダヤの神の超越的な力を強調、その意味を深化させることになった。

人間の創造についていえば、マルドゥクはエアに命じ、エアはキングの血で人間を創造したのにたいして、「創世記」第一章ではエアのような実行者を必要としなかった。神エロヒームの言葉だけで人間が創造される。ただ、「創世記」第二章では、ヤーウエは「土のちり」を材料とする。この人間創造の材料について、「エヌマ・エリシュ」ではキングの血液が使われたのだが、メソポタミア人は血液からの方法とともに、粘土からの人間創造の考えももっていた。たとえば、「アトラ・ハース物語」では粘土と肉と血を材料としている。

地中海の対岸に住むギリシア人の宇宙論にもメソポタミアの宇宙論と無縁でない。宇宙創成論についていえば、ホメロスは『イーリアス』で万物と神々は水の神のオケアノスとテチュスから生まれたとのべていた。ヘシオドスの『神統記』になると、オケアノスとテチュスはカオスにはじまる進化型の宇宙創成の後の段階で出現し、創成の神の役割はなくなるのだが、ギリシア・ミレトスの哲学者タレスは水を始原アルケーとする自然学を説いていた。これらの水の宇宙創成論の起源もメソポタミアの水の宇宙創成論にさかのぼれると考えられている。⁽¹⁹⁾

ギリシア神話も多神教的世界、そこから一神教へ移行することはなかったが、ユダヤ人の「第二イザヤ」が活躍するなど一神教の超越神の信仰が盛んになる時代、ギリシア人のあいだでは神を追放、始原にもとづく宇宙論が説かれようになった。ギリシアでも多から一へ、多様な宇宙は水からの生成として説明される。タレスの弟子のアナクシマン드로スは「無限なもの」、その弟子のアナクシメネスは空気を始原とする説を提示した。ヤスパースのいう枢軸の時代に、地中海の両岸で、超越的な唯一神による宇宙論と無神論的な唯一の始原による宇宙論が唱えられていたのである。

宇宙構造論でもメソポタミアからの影響がみとめられる。円形の大地をめぐる大洋の観念はいうまでもなく、タレスの水に浮かぶ大地の思想もメソポタミアに伝えられていた宇宙構造論にさかのぼれる⁽²⁰⁾。

しかし、ギリシア宇宙論の最大の特質といえるのは徹底した幾何学化である。タレスの弟子のアナクシマンドロスは円盤の大地とそのまわりを回転する円環の天体からなる同心円的な宇宙を構想していた。この宇宙の対称性からアナクシマンドロスは大地がなにも支えられずに宙に浮く大地の観念を主張した。他の文明がついに到達できなかった宇宙論史における最大の事件がギリシア・ミレトスの地で起こったのである⁽²¹⁾。ここから、ピュタゴラスとその学派の人々は天球地球説の宇宙論をつくりあげ、それはプラトンに採用され、アカデメイアの学徒らの研究課題となつて、アリストテレスによつて精緻な理論として集大成された。

中世ヨーロッパのスコラ哲学ではキリスト教にアリストテレスの宇宙論が取り込まれる。メソポタミアの宇宙創成論はユダヤ教・キリスト教の成立によつて神学的に深められ、宇宙構造論はギリシア人によつて洗練された理論になり、それらがヨーロッパの地で結合される。メソポタミアの宇宙論が強固な宇宙論に生まれかわる。この宇宙論を克服することで、近代の科学も生まれる。「エヌマ・エリシュ」の宇宙論はこの意味で現代科学の源泉でもあるのだ。

むすびにかえて

現代科学が「エヌマ・エリシュ」の宇宙論にまでさかのぼれるとはいつても、それはこの宇宙論のもつ一面、現代の私の眼には比較的見えやすかった一面である。「エヌマ・エリシュ」に関心をよせるようになった動機もそこにあったのだが、すでにのべる機会があつたように、バビロニア人にとっては宗教的・政治的な力にその意味をみとめていたのだ。「エヌマ・

エリシュ」がバビロンの新年祭でエ・サギラ神殿のマルドゥク像の前で唱詠されるとき、怪物のティアマトを退治して天地を創造したマルドゥクはバビロンの王にのりうつり、より強力な怪物となって全バビロニアの人民に君臨する。

それは「エヌマ・エリシュ」の宇宙論にかぎられない。ユダヤ・キリスト教における天地創造の物語は創造者である神ヤーウエの偉大さを宣するものであった。ギリシアの宇宙論でさえ政治から独立していない。アナクシマンドロスの対称性にもとづく宇宙——平等性の原理にもとづく宇宙の成立はポリス社会の市民階級が勝ちとった政治的平等主義の熱気のなかで誕生したのである。そこから、プラトン、アリストテレスの天球地球説へ発展するのだが、この階層化された天球地球説には、プラトン、アリストテレスが理想とした、統治者・軍人・生産者からなる階層的社会の觀念が反映していた。⁽²²⁾中世ヨーロッパの宇宙論でも宇宙と国家は一体と見られていた。宇宙論はその社会の産物なのである。それは、現代の問題でもある。ビッグ・バン説は現代科学の輝かしい成果なのだが、この理論も「無からの創造」というキリスト教の教義の伝統と独立に生まれたとは考えがたい。

しかし、ここで強調しなければならないのは、科学が世界のあらゆる事物の説明法であるという点からいって、科学そのものが宇宙論と見ねばならないということである。かつて、厳密な論理で組み立てられた宇宙論＝科学は人間をキリスト教の神と神に支えられた政治の支配から人間を解放する強い力となったのだが、その厳密な論理性は技術の力ともなった。科学の魅力であった厳密な論理性は人間を呪縛する魔力にも変わる。いま、それはあまりにも巨大すぎて、私たちの眼には見えにくくなっているが、資本主義と結託した科学の怪物が全地球上を跋扈する。マルドゥクやヤーウエのようにである。

この科学の怪物に私たちはどう立ちむかうべきであるのか。未来に生きる人類に負わされた課題を考えるとときの重要なヒントが、最初の都市文明が生んだ宇宙論のなかに探せるかもしれない。私は、宇宙論史の研究にそのような期待もいっているのである。

注

「エヌマ・エリシュ」のほか、「エンキとニンフルサグ」「虫歯の物語」「アトラ・ハースス物語」の訳は『筑摩世界文学大系・古代オリエント集』（筑摩書房、一九七八年）によった。『旧約聖書』については、『聖書・新共同訳』（日本聖書協会、一九九七年）を利用した。

- (1) H・フランクフォート他『古代オリエントの神話と思想』社会思想社、山室静・田中明訳、一九七八年、二二一ページ
- (2) 同書、二二三ページ。
- (3) Jeremy Black and Anthony Green, *God, Demons and Symbols of Ancient Mesopotamia*, British Museum Press, 1998, p.56.
- (4) M・リュッタナン『バビロニアの科学』矢島文夫訳、白水社、一九六二年、一〇四ページ。
- (5) M.Huxley, 'The Shape of the Cosmos According to Cuneiform Sources', *JRAS*, Series3, 7, 2(1997), pp.189-198.
- (6) Jeremy Black and Anthony Green, op. cit. p.140.
- (7) 木村重信『ヴィーナス以前』中央公論社、一九八二年、三四ページ以下。
- (8) S.N.Kramer & J.Maier, *Myths of Enki, The Crafty God*, Oxford University Press, p.2, 38f.
- (9) S.N.Kramer, *The Sumerians*, The University of Chicago Press, 1963, p.118.
- (10) S・N・クレイマー『歴史はシュメールにはじまる』佐藤輝夫・植田重雄訳、一九五九年、八一ページ以下、
- (11) 中島健一『古代オリエント文明の発展と衰退』校倉書房、一九七三年、六四ページ。
- (12) 『筑摩世界文学大系・古代オリエント集』筑摩書房、一九七八年、一〇七ページ。
- (13) 荒川紘『龍の起源』紀伊国屋書店、一九九六年、一〇八ページ。
- (14) 前掲、中島健一『古代オリエント文明の発展と衰退』六〇ページ。

- (15) アンデレ・パロ『ニネヴェとバビロン』並木居斉二訳、みすず書房、一九五九年、一一六ページ。
- (16) H・フランクフォート『古代オリエント文明の誕生』曾田淑子・森岡妙子訳、一九六二年、七七ページ。
- (17) British Museum, *Dictionary of the Ancient Near East*, British Museum Press, 2000, p.105.
- (18) John Day, *God's Conflict with the Dragon and the Sea*, Cambridge University Press, 1985, p.50. デイは「エヌマ・エリシュ」との関係では『詩篇』一〇四に見られる宇宙創成論との繋がりのほうが強いと考えている。
- (19) G.S.Kirk, J.E.Raven & M.Schofield, *Presocratic Philosophers*, Cambridge University Press, 1983, p.93.
- (20) Ibid.p.92.
- (21) 荒川紘『科学と科学者の条件』海鳴社、一九八九年、四三ページ以下。
- (22) 同書、一八九ページ以下。

付記

私の研究室からは南アルプスが望める。この春の季節、靄がかすむ日も多いが、晴れた日には手前の龍爪山から幾重にも重なった山並みが稜線を浮き上がらせてくれる。しかも、時間の経過とともに表情を変える。紅に染まる夕焼けの光景もおすすめだが、しかし、私は水墨画のような奥深さを感じさせるときが一番好きだ。

私が旧教養部の建物からここ人文学部C棟二階に移ってきたのは一昨年の八月、北側の部屋ということで富士山が見られるかと期待していたのだが、前の道路と樹木で富士山の方向の視界は遮られていた。しかし、部屋の窓際の東側に座ると南アルプスまでの眺望が開ける。富士山ではこれほど、窓の景色に魅せられることがなかったであろう。南アルプスの景色には無限の深みがある。

この無限の深みに見入っていると、建物のなかで起こっていることなど、意識から消え去ってしまう。世界には南アルプスと自分があるだ

け、ときには自分さえも忘れ、授業や会議に遅れそうになる。この精神の状態をなんと表現したらよいのか、宇宙感情とでもいうのだろうか。そんな宇宙感情が私を古代の宇宙論的叙事詩「エヌマ・エリシュ」に誘ったくれたのかもしれない。とにかく、私のこころは南アルプスの無限の深みを超えて、古代のメソポタミアに運ばれていった。

じつは、「エヌマ・エリシュ」は旧教養部での講義・科学史でもとりあげていた。何種類かの科学史の講義のうち、ヨーロッパの科学史ではギリシア・ミレトスの自然学者たちの宇宙論からはじめることが多く、その源流として「エヌマ・エリシュ」のことを話す機会が幾度かあった。半期制となった今ではとても無理だが、通年制だった当時は、こんな古い時代の話もできたのである。やはり旧教養部時代のことだが、自主ゼミ・科学史でも、フランクフォート編の『オリエントの神話と思想』を読んだことあり、そのときには、科学史の講義のときよりも「エヌマ・エリシュ」について詳しい説明ができたはずである。

そして、今年度の大学院の講義「科学技術と人間」でも「エヌマ・エリシュ」をとりあげることになった。前半では、リン・ホワイトの論考「現在の生態学的危機の歴史的根源」をもとに現代の科学技術の危機を話したが、後半の講義の材料をなににしようかと迷っていたとき、以前に講義とゼミでとりあげた「エヌマ・エリシュ」を思い起こしたのである。危機の遠源がキリスト教の神と人間と自然の理解にあるとするホワイトの主張を検討するには、ユダヤ・キリスト教の起源との関係でも重要な位置にある「エヌマ・エリシュ」は読まれてよい。とくに、古代メソポタミアにおける神と人間と自然がどう考えられていたかに注目して読むことになった。

しかし、時間が足りない、私の好きな宇宙論にはほとんど時間を割けなかった。隔靴搔痒の講義だったとの思いがつよい。ということもあり、この論文のテーマは「エヌマ・エリシュ」で語られる宇宙論となった。それに、本文でも述べたように、「エヌマ・エリシュ」の宇宙論は現代の科学技術社会の危機との関係から関心がそそられる。「エヌマ・エリシュ」の宇宙論の起源とその影響は深く検討されてよい。

それにしても論文とはなにか。私にとって、たいていのことは、だれかに話せばそれでお仕舞いであつた。もちろん、講義はそうであつた。

毎度自転車操業の資料づくりに追われていたのだが(これだけは今でもつづいている)、その苦勞も勉強したことも講義とともに消えてしまう。講義で話せなかったことは、飲み友達に学内のたまり場や居酒屋で話して聞かせればよかった。なにか新しい発見があれば、そこで自慢すればよい。鼻をへし折られれば、もう一度考え直せばよい。素直に友達の意見を聞くのもよい。教養部が健在であった時代にはそうであった。

ところが、教養部の解体が日程にのぼったころからは、そのような機会もめっきり減った。今ではほとんどない。研究室で講義の準備が終れば、あとは、南アルプスの山並みを眺めている。そして、講義で話せなかったことは、こうした文章になる。

そういうことで、教養部に勤務してからの約一〇年間というものは、ときには、依頼されて論文を書いたり、本を出したりはしたが、大学の紀要に書くことはなかった。だが、いまはちがう。以前ならば、学内のたまり場や居酒屋で話していたようなことが紀要の論文となる。